

視察先別報告 ザンビア

【技術協カプロジェクト】

アフリカにおけるウイルス性人獣共通感染症の調査研究プロジェクト

概要

ザンビアにおけるウイルス性人獣共通感染症に関する研究・調査能力の強化を目的として、診断法の開発・改良、出血熱ウイルスなどが自然界においてどこで、どのように生存しているのか、またいつ、どうやって人間の社会に侵入してくるのか、そのメカニズムの解明を目指している。

1

伊澤 咲弥

近隣諸国では様々な感染症が流行し、ザンビアはいつ感染症が流入してもおかしくない環境にある。ザンビアにおいて人獣共通感染症は早期解決されるべき課題と言え、研究の必要性を感じた。共同研究を行うことで、双方に研究分野や国際関係での発展が期待される。一方で研究資金は多額であり、研究対象も果てしないように感じ、限られた時間と資金の中で何をを行い、残し、伝えるかが問われる難しい分野であると感じた。研究成果として、国内でエボラ出血熱の診断体制が整備できたと聞き驚いた。しかし新種の病気に対応できるザンビア人獣医師は少ないという。現地の獣医師の能力向上のための人材育成もまた重要なプログラムであると感じた。

2

伊藤 葉子

獣医学生である私にとって、最も興味のあるプロジェクトだった。このプロジェクトは、獣医師養成のため、日本が建物の建設を含め、研究員の派遣、資料の提供などから支援したのが始まりだ。それらの初期支援は終了し、現在は北海道大学獣医学部と共同で人獣共通感染症の研究を行っている。現地のニーズにこたえて、形を変えながら長期間行われているプロジェクトだ。将来的にこのプロジェクトが終了することを念頭に、積極的にコミュニケーションをとり信頼関係を築きながら現地研究者の育成に力を入れているという。確かなニーズがあったこと、柔軟な支援を行ったこと、プロジェクト終了後まで見据えたことなどが成功の理由だと考えた。

3

今田 澄子

「人材は育っています。欲しいのは“どこでもドア”です」北海道大学で学んだザンビア人青年の作業する傍らで、JICA専門家はそう言って笑った。30年前日本の支援で作られたザンビア大学獣医学部は、いまや周辺国から留学生を迎えるまでになっている。試料分析・診断等で海外とやり取りをする際、検査にかかる時間に加えて、検体の輸送等手続きに膨大な時間を要し、歯がゆい思いをすること。研究の発展は学術レベルの問題だけでなく、インフラ、人の意識等様々な事柄がかかわってくる。どの分野においても同様であろうが、それらを変えてゆくのは並大抵のことではない。見学する先々で思い知ったそのことにまず直面した最初の訪問地であった。



4

江口 辰之

近年、SARS、ニパウイルス、ハンタウイルス、ヘンドラウイルスやアレナウイルス感染症、インフルエンザ、エボラ出血熱などの新興・再興感染症が世界各地で発生し、アフリカもいくつかの感染症に脅かされている。これらはすべて、自然界の野生動物に寄生し、被害をおよぼさずに存続してきた微生物による人獣共通感染症で、ザンビアでも2008年にアレナウイルス感染者が出ている。ザンビア大学獣医学部は1988年に第1期の卒業生を輩出し、1982年にはザンビア全土に8人の獣医師しかいなかったところを、現在は300人以上に増やし感染症の研究に貢献している。ザンビア大学はインフルエンザやエボラを研究できる国内唯一の施設であり、JICAや北海道大学の人づくりを重視する考え方に感謝をしている。ザンビア大学獣医学部が出来ることにより、ウイルス感染者を自国で発見をすることが出来るようになった。今後、ザンビア大学・保健省・農業家畜省等との連携を強化することにより、人獣共通感染症のより一層の成果が期待されると感じた。

5

黒川 叔乃

「この研究施設は多くのザンビア人に安心を与えている。」ODAのシンボルマークが貼られた機材が多数設置された研究室で働くムウイネ教授が語ってくれた。内陸国のザンビアは、エボラ出血熱などの感染症リスクにさらされ、今までは診断の度に、周辺国に検体を送付していた。しかし、この施設で自国での診断体制が構築されたことにより、早期診断が可能となり救える命が増えたという。また、ザンビアと日本が共同研究することで、機材の供与や一方的な技術移転で終わらず、ザンビアの研究者の検査技術・教育体制の普及にも貢献していると実感した。ウイルスの伝播経路などの解明は、ザンビアと日本だけの問題ではなく地球規模の課題であるため、本プロジェクトの重要性を認識した。

Republic of Zambia

6

河本 梨絵

遠い南部アフリカの地、ザンビア。この国の国立ザンビア大学獣医学部に、およそ30年前のその設立から北海道大学が関わっているとは。

本視察では、北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターの獣医師、梶原・森両専門家の案内で獣医学部の施設を見学。研究者の実験現場、危険レベルで分けられたウイルス検出検査の部屋などを視察した。北海道大学で半年の研修を積んだ現地研究者は、慣れた手つきで試験器具を扱い、その様子は誇らしげに見えた。一方で、日本では当たり前前の整理整頓などがザンビア人に馴染まない、などのエピソードも。現地での技術協力や共同研究を通じて人材の育成に取り組む。近い将来、当地の人材で自国の課題に取り組むことができる日が来れば、と願う。

7

高場 希恵

ザンビア大学は国内一の大学で、この獣医学部が感染症に対する高い研究能力や検査診断体制をもつことは、国民の命に直結している。例えばウイルスを持ち出して日本で研究したり、感染症発生後の処理において援助を行うなどという形もとれると思うが、日本が行っているのは、あくまでザンビア国内でザンビア人によって感染症を未然に防いだり、対処できたりする体制の構築、人材の育成である。この度「エボラ出血熱の診断体制の構築」という成果も出たが、このような日本の支援の方法は、必ずしも話題性のある課題に対する結果を目に見える形で、かつ短期間で示せるものではないため、本来非常に成果の見えにくい援助のあり方である。しかしザンビア大学獣医学部がウイルスの面から国民の健康や安心を守る機関になっているように、このような援助を継続して行うことは、確実に国の発展や国民の生活の向上に寄与していると感じた。

8

中里 祥子

なぜ獣医学分野で感染症の研究を行うのか。しかし、ザンビア大学を訪問し、その疑問はクリアになった気がする。昨年のエボラ出血熱のアウトブレイクをはじめ、鳥インフルエンザなど人間に危機が及ぶ感染症は動物を媒介することが多い。動物の多いアフリカで感染症の研究をすることは、日本で研究する以上のスケールの大きさであることに加え、国が陸続きであるという、日本では経験することのできない環境にある。研究を進める上で、日本の知識技術と野生動物が多いというアフリカの環境とを融合し、有事の際に即座に対応できる人材育成がされつつあることは一つの成果だろう。

9

花村 さくら

ザンビア大学は非常に美しく、校庭の真ん中にはザンビアの国の形をした池がある。日本企業（清水建設）によって建てられたそうだ。北海道大学とザンビア大学との交流の歴史は長く、昔からの人的な交流があったおかげで今がある。過去に教えたザンビア人が今では仕事のパートナーとなっている。人と人とのつながりは目に見えないがとても大切ということが伝わってきた。ザンビア大学獣医学部を作るといふとき（フェーズ1）には英国人や日本人がトップを担ってきたが、だんだんとザンビア人を積極的に投入し（フェーズ2）、現在ではザンビア人の教授や、初のザンビア大からの修士課程修了者が活躍している。かつては援助する側とされる側であったが、今となっては共同研究をする関係である。

10

峰元 義人

2014年、西アフリカで大流行したエボラ熱感染は未だ終息していない。ザンビア大学と北海道大学は共同してこのエボラ出血熱や鳥インフルエンザウイルス等の人間社会への侵入経路を探っている。

このプロジェクトは、環境・エネルギー、生物資源、防災など地球規模の課題を克服するための技術協力である。

「ウイルスはどこからやってきたのか」「何処にいて何をしているのか」「どうやって人の世界に入ってくるのか」解明できれば確かに制圧対策のための科学的基盤を提供できる。

しかし、具体的な研究内容は我々一般人には解りにくい。5年間のプロジェクトで果たして成果を創出できるのか。研究者には国民の税金を使ったODAであることを忘れてほしくない。

11

蓑田 竜史

多様な感染症の拡大はグローバル化が進むほど深刻化する。そのスピードに研究が追いついているのだろうか。感染源とされる地域での研究が必要と考えるが、北海道大学からやってきて日々、危険と隣り合わせで研究されている方々に頭が下がる。印象に残ったのは、研究者の方々が「この研究は現地の人に貢献しているのか」と心配されていたこと。結果が求められるODAの過酷な現実。結果がでないこともあるのが研究。研究自体に意義もあると思うが、ODAの性質上、期限も予算も限られてしまう。だからこそ、全人類的な課題に関しては各国の国益や政治的戦略を越えた、共同研究や対策が必要。一方で、様々な感染症が「生物兵器」ではない証拠もまだ出ていない段階では、各国の利害が絡まないよう、個別に研究する必要性もあると感じる。